

# 思い出のペンダント

孤高の牛

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

あの日の想い出はきつと、ずっと、色褪せない

※この物語は同作者執筆作品『その想いは夜空に』のアフターストーリーとなっております  
ります

『再会した時の話』や『彼視点での心情や話』を見たい方はまずはそちらをご覧ください

# 目次

想い出のペンダント

1



# 想い出のペンダント

「おかあさま、具合は大丈夫ですか？」

「ええ、お陰さまで大分良くなったわ。ありがとう、そしてごめんなさいねリーリエ……  
何から何まで迷惑を……」

「もー、おかあさまったらまた謝ってる。家族なんですから迷惑を掛け合うのは当然ですっ！」

私が再びアローラからカントーに戻って一週間。

流石に時差や気候差を考えて、それにおかあさまの事も考え少し急がず休息を取って  
からもう一度アローラに行くと言う事になり、ようやく明日、アローラに戻る事となりました。

おかあさまは私への引け目さえ抜けばもう見違えるくらいに元通りの元気なおかあ  
さまになり、もう何も心配する事も殆んど無くなり安心して向かう事が出来ます……そ  
の引け目を無くしてくだされば本当に心配事は無くなるのに……

「……そうね。本当に立派に育ったわ、リーリエは」

「そんな事はないです……そう、まだあの人の隣に立つには全然……」

私にはトレーナーとしての憧れの人であり、異性として恋い焦がれる人がいます。その人はとつても強くて、優しく、かっこよくて、私がエーテル財団から逃げ回っている最中ずっと側にいてくれて。

寂しくて眠れない夜は夜が明けるまでずっとお互いの話をしたり、一回私が迷子になった時、夜中になってもう怖くて泣いて泣いていた私を見つけてくれて。

あの時、何よりも最初に抱き締めてくれたのが私にとっては他のどの言葉よりも恐怖を安心感に変えてくれる魔法の様に思えて。

そしてそれから『迷子にならない様に』って手を繋ぎながらずっと旅をしてくださったのが、今でも鮮明に思い出せます。

……思い出すとちよつと恥ずかしいですけど。

「ね、あの子とはどこまでしたの?」

「……はい?」

「えー、いやねえ。貴女一回帰った時飛びきりの告白してもらったんでしょ? そしたらもう、どこまで進展してるか聞くのは親としての特権じゃない!」

「……な、なんでそんな恥ずかしい事聞いてくるんですか!」

「そりゃあもう、カントーにいる間ふつと物思いに耽ってたりしてたじゃない? アローラから帰ってきたら憑き物が落ちた様な表情してたから大体は察したけど、まあだ

から余計気になるのよねえ」

そうやって想い出に耽っていると、唐突におかあさまがとんでも無い事を……

ど、どこまでしたと言われてもその、告白したその日から翌日の早朝までしか居られなかったのですねに進んでる訳でも無いですし……うー……でも言うのは恥ずかしいです……

「そ、その……」

「もう、勿体ぶらずに言いなさいな」

「うー……その……ちゅ、ちゅー、まで……です」

「……ああ、もう。すっかり大人になっちゃって……」

感慨深そうに目頭を手で押さえ、天を仰ぐ様な格好になるおかあさま。

……私はもう何年も前から小さい子どもじゃないって言ってるのに。

でもそこがちよっぴり嬉しいのは秘密です。

「大げさですー!」

「大袈裟なものですか! 娘の成長を噛み締めるのは親の特権ですつ!」

「親の特権乱用し過ぎです……」

因みにですが、これはおかあさまの素の姿。

決して酔っている、とかそう言う事ではないのです。

本来のおかあさまはただただ優しく、優しすぎるくらいにのちよつと困るところもありながらも自慢のおかあさまです。

「で、で？ それよりどつちからしたのよ？」

「……………それ、言わないといけないですか？」

「言わないと一時間類ずりの刑よ」

前言撤回します、ちよつとどころでは無かったです。

たまに手の付け様の無いくらい親バカになるところは、どうにかしてください……

むむう……しかし言わなければ一時間類ずりの刑。

それは流石に私としても色々と疲れてしましますが……それだけは言いたくないです。

「ひ、秘密ですっ」

何せ初めてのキスなんです、それは彼との、彼とだけの秘密にしたいから。

だから言ってしまう訳にはいかないんです、どうしても。

「ふふっ……………言うと思つたわ」

「えっ…………？」

「私もそうだったから。初めてのキスって大切にしておきたいものよね、する機会にしてもその想い出も、特に」



「……もうっ。いじわるです、おかあさま」

まるで私の答えを見越していたかの様にイタズラな笑みで『ちよつとどんな反応するか見たかったの、ごめんね』なんて続けられたら、私としてはもう怒る気にもなれませんが。

「頑張りなさいよ、リーリエ。貴方なら立派なお嫁さんになれるわ!」

「お、お嫁さん……あの人のお嫁さん……」

五年ぶりに会った最愛の人を思い浮かべる。

それと同時にふとキスをした事を思い出し、顔から火が出るくらいに熱くなってしまう。

それでも冷静さを保ち、五年間憧れ続けていた事を口にされ、それをしつかりと現実的に、手が届く位置にある事を認識する様に眩く。

……夢じゃない。これは夢で終わらなくて、私はあの人の隣に立って、永遠に添い遂げられる。

「そう、今のあなたは私と同じくらいポケモンが強くて、それでいて『女』としても本当に自慢に思えるくらいに成長したわ。だから自信を持ちなさい」

「……はいー!」

……このままだと、あの人に笑われてしまいますね。

それじゃあ隣に立つ事は出来ない。

だからもつと変わらなくちや、今まで一緒にカントーを旅したポケモンや行く先々で会った人達にもちゃんと顔向け出来る様に。

ギユツと首から提げていた紅いペンダントを握る。

これは彼から貰った最初のプレゼント、私の何より一番大切な宝物なんです。

「それじゃあ私はご飯作るから、まあ彼との思い出にしつくり浸ってても良いわよ」

「お、おかあさま!」

ペンダントを握っていたのを見られていたのか、何か生暖かい様な目でからかわれてしまいました……

でも、このペンダントの本当の意味をおかあさまは多分知らない。

これはあの人と私の秘密、二人だけの大切な大切な秘密なんです。

私はもう一度ペンダントを触り、隣にある私の部屋——そこにある彼と島巡り達成の記念に撮った写真に近付く。

こうして見ていると、このペンダントを貰った時の事が鮮明に浮かびます。

キツカケはふとした事で、何となくシヨウウィンドウから見える紅い宝石が気に入って。

何度か見に行つて、でもお金は無いからと見るだけに留めておこうとメレメレ島から

暫く離れる事になった日に、船を待つ間にせめて一目と見に行っただけです。

☆

「……あつ、売れちゃったんですね、あのペンダント」

最後に見ようと思った時には既に飾られていなくて。

きつとあんなにも魅力的だったから買われていったのかなと、残念に思いながらも納得して帰ろうとしていたんです。

「……あれ、リーリエ？」

「へっ……？　なんであなたがここに？」

そしたら彼がいきなりお店から出てきて。

全く予想外な事に動揺してしまって、私は少し混乱していたと思います。

「……あー、その」

「はい……？」

「い、いつも俺……のポケモンとか、リーリエにお世話になってるからな。その、日々の

お礼？ にプレゼントでも……とね」

小包みを私に向けて渡してくれる彼に、いきなり過ぎて驚いたのと、まだその時は少し距離感みたいなものを覚えていて。

どう返して良いか分からず取り敢えず受け取りました。

「え、えつと……中身は何が……？」

「い、今それ言ったら楽しみが無くなるだろ」

「あ、そ、それもそうですねっ！」

ぎこちないやり取りの後に、丁寧に丁寧に包みを広げていく中で、彼が緊張しているのが伝わってきて、私まで少し緊張してしまったのを良く覚えています。

彼の緊張している姿に少し可愛いなあ、と思いながら慎重に開けていくと、白くて細長い箱が。

「……あ、開けますね」

「おう……」

何故か異様にドキドキしながら包装を捲っていくと、見えてきたのは小さい、でも人を惹き付ける綺麗な紅い宝石。

……まさか、いやでも一介の人間が買えるくらい安くもない値段はしていたはず。

疑心暗鬼になりながらも震える手で細長い箱を開ける。

「……………これ」

「……………俺さ、リーリエの好みとかまだ全く分かんねえけどよ。まあ、何て言うか……それ、見てたの偶然……ね」

その時の私は、もうそれは言葉にならないくらい嬉しくて。嬉しくて堪らなくて、頭が真っ白になっていたと思います。

見られていたと言う恥ずかしさもありましたが、それより、何よりもちよつと距離感があるのかなって心配していた彼との距離がグツと近くなった様な気がして。

「あ、ありがとうございますっ！ とっても嬉しいです！」

「お、おう。…………喜んでくれて良かった」

距離が近くなったと思うと、そう言つて微笑んだ彼の笑顔に不意を突かれたみたいにドキツと胸が跳ねて。

…………多分、これが初恋のキツカケだったのかな、なんて今になって思っていたり。

☆

「早く、また会いたいです」

強くて、憧れで、かつこ良くて、優しくて、いつでも側にいてくれて、でも寂しがり屋で実はちよつと泣き虫なところも、全部全部大好きな彼。

「リーリエー、ご飯出来たわよー」

「あ、はい今行きます」

……今度は手を引っ張ってもらうのではなく、きっと隣で。  
ずっと、隣で。

私は歩いていく。

— f i n —